

学習者の視点を活かした実習レベル目標の作成

—聖路加国際大学カリキュラム2015実習レベル 目標検討ワーキンググループ活動報告—

池口 佳子¹⁾ 佐居 由美¹⁾ 長松 康子¹⁾ 千吉良綾子¹⁾ 小林 京子¹⁾
 飯田真理子¹⁾ 大橋 明子¹⁾ 永井 智子¹⁾ 高橋奈津子¹⁾ 三森 寧子¹⁾
 三浦友理子¹⁾ 吉田 千文²⁾ 松谷美和子³⁾

Constructing Training-level Goals Based on Learners' Perspectives

—Report on the Activities of the Working Group for Training Level Goal Setting in 2015 Curriculum at St. Luke's International University—

Yoshiko IKEGUCHI¹⁾ Yumi SAKYO¹⁾ Yasuko NAGAMATSU¹⁾ Ayako CHIGIRA¹⁾
 Kyoko KOBAYASHI¹⁾ Mariko IIDA¹⁾ Akiko OHASHI¹⁾ Tomoko NAGAI¹⁾
 Natsuko TAKAHASHI¹⁾ Yasuko MITSUMORI¹⁾ Yuriko MIURA¹⁾
 Chifumi YOSHIDA²⁾ Miwako MATSUTANI³⁾

[Abstract]

Since the integration of St. Luke's College of Nursing and St. Luke's International Hospital in 2014, a new curriculum was introduced with the motto "Learn bedside at bedside" in April 2015. This paper reports the outcome of 6 months' work on the development of new goals for different levels of nursing practice that meet the new curriculum as well as consideration of formation evaluation.

The working group reconfirmed the education ideals of the university and emphasized the following.

1. Introducing the concept of people-centered care (PCC) through easy-to-understand representation
2. Reconsidering the expression of factors of table
3. Making level III goals that can be accomplished by all undergraduate school student
4. Obtaining the agreement of the entire school and each nursing department
5. Making goals simpler for students

The working group invited 4th-grade students who had completed nursing practice for their opinion on the draft of the new goals and revised it accordingly. Furthermore, public hearings were held twice for school staff members and another revision was made. Finally, the goals for different levels of nursing practice for Curriculum 2015 were developed with 3 stages of seeking learners' perspective. The introduction of formation evaluation was rejected.

[Key words] goals for different levels of nursing practice, perspective of learners, education ideals, formation evaluation

-
- 1) 聖路加国際大学カリキュラム2015実習レベル目標検討WGメンバー St. Luke's International University, Committee of Curriculum Management, Working Group of Practice Level Goals
 - 2) 聖路加国際大学カリキュラム運用委員会委員長 St. Luke's International University, Committee Chair of Curriculum Management
 - 3) 聖路加国際大学看護学部 学部長 教務部長 St. Luke's International University, Dean, Director of Academic Affairs

【要旨】

本学においては、2014年の聖路加看護大学と聖路加国際病院との法人一体化を機に、「臨床で学ぶ、臨床を学ぶ」を合言葉に、より臨床での教育を強化したカリキュラム2015が2015年4月の学部入学生より導入された。このカリキュラムに対応した実習のレベル目標の検討と形成評価導入に関する検討を行ったワーキンググループの半年間の活動を報告する。

実習レベル目標を作成する際に重視した点は、教育理念を再確認し、People-Centered Care の概念を分かりやすい表現で入れる・横軸の要素の表現を見直す・学部の全学生がレベルⅢまで到達可能な目標とする・各領域、全学の合意のもとに作成する・学習者である学生にとって、使いやすいものにするのであった。そのために、実習が終了した学部4年生へのヒアリング・2回にわたる公開ワーキングを実施し、学習者の視点を活かした3段階のカリキュラム2015実習レベル目標を作成した。形成評価に関しては、検討の結果導入が見送られた。

【キーワード】 実習レベル目標、学習者の視点、教育理念、形成評価

I. はじめに

看護基礎教育において、臨地実習は重要な実践教育の場である。聖路加国際大学においては、2014年の聖路加看護大学と聖路加国際病院との法人一体化を機に、「臨床で学ぶ、臨床を学ぶ」を合言葉に、より臨床での教育を強化したカリキュラム2015が2015年4月の学部入学生より導入された。このカリキュラム2015においては、臨地実習が必修25単位・選択9単位と増えている¹⁾。

このカリキュラム2015に対応した実習のレベル目標の検討とレベル目標に対する形成評価導入に関する検討は、2014年度カリキュラム運用委員会において開始された。この流れを受け、実習単位認定者連絡会の中から、実際に実習を担当している教員間でこの課題について検討していこうとワーキンググループが立ち上がった。このワーキンググループは、実習単位認定者会連絡会に参加している各実習・領域の意見を反映するために、各実習もしくは各領域から1名が参加する（佐居・長松・千吉良・小林・飯田・大橋(明)・永井・高橋(奈)・三森・池口)ことを前提とし、看護教育学教員(三浦)・カリキュラム運用委員会委員長(吉田)・教務部長(松谷)から構成された。また、池口・佐居・長松・千吉良の4名がコメンターとなり、ワーキングを進めていくこととなった。

II. カリキュラム2015実習レベル目標の検討ワーキンググループの活動目的

カリキュラム2011実習レベル目標の活用の現状を踏まえ、カリキュラム2015のカリキュラムに合わせた実習レベル目標の作成と実習レベル目標に対する形成評価(ルーブリック)の導入について検討を行う。

III. 実習レベル目標とカリキュラムポリシー

本学においては聖路加看護大学の時代から、教育理念に則ったカリキュラム構成により、実習の目標を段階別に位置づけ、学生・臨床指導者・教員が共通理解のもと1年次～4年次まで学びを積み上げていけるように実習レベル目標が設定されている。現2～4年生が学んでいるカリキュラム2011においては、実習レベルを3段階に設定し、レベルごとに目標を設定している(表1)。

本学の看護学部のカリキュラムポリシーは、『看護を「人間と環境との相互作用により、最適な健康状態を生み出すことをめざす働き」と考え、人間、環境、健康・看護の4概念とそれらの関係に基づき、基礎科目から専門科目を積み上げて学修できるよう配置する。看護の基本姿勢の中心概念はPeople-Centered Care (以後、PCC)とする。』である(図1)。

これらのカリキュラム構成要素を、実習レベル目標の横軸の要素とし、1年～2年次の基礎実習をレベルI、

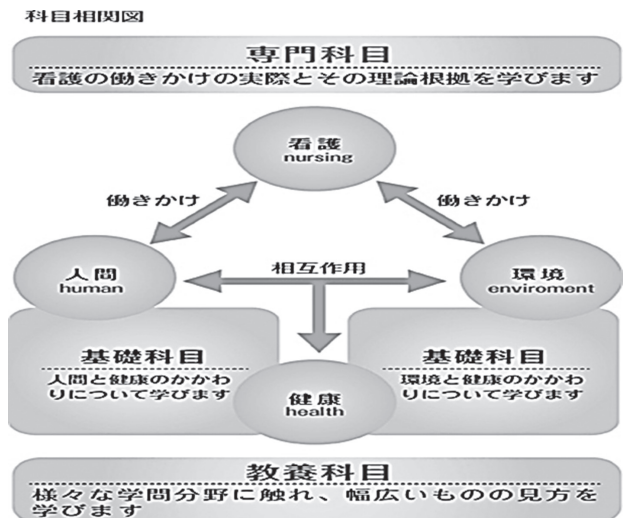


図1 聖路加国際大学カリキュラムポリシー(大学HP²⁾)より

表1 カリキュラム2011 実習レベル目標

要素	看護の対象 (人間・環境)	相互作用	看護実践のための 思考過程	看護技術の実施	チームアプローチ	看護職としての 責務・倫理
レベルⅢ 総合実習 養護実習 公衆衛生看護 学実習	保健医療福祉システム ならびに長期的な時間 的予測の観点を含め て、個人・家屋・集団 (組織・チーム)・社会 という看護の対象の広 がり理解できる。	(定められた期間に) 主体的に最適健康状態 に向けて対象一環境間 にも働きかけながら、 相互作用を評価しつづ 関わることができる。	情報収集、課題判別、 計画立案、実施、評価、 の一連のプロセスを効 率的に活用する。	対象の状況をふまえ、 適した方法を自分で選 択・創造して、主体的 に技術を提供する。	チームアプローチにお ける看護の役割を認識 し、チームの一員とし て主体的にメンバー シップをとることができる。	【レベルⅠ～Ⅲまで共 通する目標】 ・対象に誠実に向き合 い、真摯な態度で行 動できる ・内省に基づき、対象 の価値観を尊重し、 その人にとっての最 善を考えて行動でき る。 ・自己洞察を深め、倫 理的・建設的思考を もつことができる。 ・看護実践を通して、 看護に対する自分の 考えを述べることで きる。
レベルⅡ 看護学実習 A～G 小児 周産期 成人(急性期) 成人(慢性期) 老年 精神 地域在宅	【対象の理解】 生涯発達、健康状態、 生活の変化、文化や地 域性という観点から、 各領域における対象の 個性を理解できる。 そのことを通じて、看 護の対象の多様性を理 解することができる。	人間と環境と看護の相 互作用を通して、看護 職としての関係を構築 することができる。	看護実践に必要な情報 を収集し、看護上の課 題を判別して、計画・ 立案・実施・評価でき る。	対象の特性・反応に合 わせた看護技術を根拠 を踏まえて選択し、安 全・安楽に実施できる。	自分が提供する看護ケ アを表明し、必要な支 援を求めることができ る。対象を取り巻く保 健医療福祉メンバー と、各メンバーの役割 を理解することができる。	
レベルⅠ コミュニケーション 実習 基礎看護技術 実習 看護展開論 実習	看護の対象としての個 人・家族・生活環境を 理解することができる。	自分の関わりを通し て、人間と環境と看護 の相互作用を理解し、 対象のニーズをふま え、行動できる。	看護実践に必要な情報 を収集し、日常生活行 動における看護上の課 題を判別し、計画・立 案・実施できる。	原理・原則に基づい て、看護技術(ヘルス アセスメント技術・生 活支援技術)を安全安 楽に実施できる。	病棟の医療チームメン バーにおける看護師の 役割を考える。医療 チームメンバーにお ける看護学生としての メンバーシップがとれる。	

表2 カリキュラム2015 実習レベル目標

要素	人と環境の理解	思考のプロセス	看護技術の実践	チーム アプローチ	人と環境への 働きかけ	看護職としての 態度
レベルⅢ 総合実習	個人・家族・集団・ 社会という看護の対 象の広がり理解する。 長期的かつ包括的な 視点で対象をとらえ ることができる。	対象者のより複雑な 状況に応じて、心身 の状態やQOLを高 めるため、課題達成 に向けた計画立案・ 実施・評価ができる。	対象に適した安全・ 安楽な看護技術を、 根拠をもとに選択・ 工夫し、主体的に実 践できる。	対象を中心とした チームにおける専門 職としての役割を認 識し、協働するこ とができる。 チームの一員とし て主体的に役割を果 たすことができる。	人間と環境の多様性 を尊重し、より複雑 なニーズに合わせた 働きかけができる。	・People-Centered Careの考 えに基づき、対象者の尊 厳を守り、真摯に向 き合い、誠実に行動 できる。 ・専門職としての倫理 観を持ち、倫理的課 題に気づき、その状 況について述べるこ とができる。 ・看護に対する自らの 考えを述べるこ とができる。 ・内省(リフレクシ ョン)に基づき、専 門職として生涯学び 続ける姿勢を身に つける。
レベルⅡ 看護学実習 A～G 小児 周産期 成人(急性期) 成人(慢性期) 老年 精神 地域在宅	個人・家族の今まで の生活やその人らし さを理解し、家族を 含めた環境の全体像 を捉えることができ る。 発達や健康状態によ って異なる人間と 環境の多様性を理 解することができる。	対象の特性をとら え、自立して、看護 上の課題を判別し、 課題達成に向けた計 画立案・実施・評価 ができる。	対象者の目標を達成 するための看護技術 を、安全・安楽に実 施できる。	チームメンバーの 個々の役割を理解す ることができる。 看護方針をチームで 共有し、チームメン バーからの支援を得 ることができる。	最適な健康状態を生 み出すよう、人間と 環境の特性に応じて 働きかけることが できる。	
レベルⅠ コミュニケーション 実習 基礎看護技術 実習 看護展開論 実習	主体性をもった生活 者としての人間と生 活環境を理解するこ とができる。	指導者の助言を得 て、看護上の課題を 判別し、課題達成に 向けた計画立案・実 施・評価ができる。	技術の適切性を確認 し、安全・安楽に看 護技術を実施できる。	医療チームにおけ る看護職の役割を考 えることができる。 看護学生として病棟 チームに参加するこ とができる。	人間と環境と看護が 相互に作用している ことを理解するこ とができる。	

3年次の臨地実習7領域をレベルⅡ、4年次の総合実習をレベルⅢと位置付けている。

IV. ワーキングで検討された内容

1. 実習レベル目標の段階の検討

カリキュラム2011の実習レベル目標は、3段階で構成

されていた。そのため、実習科目が増えるカリキュラム2015の実習レベル目標をいくつかの段階で設定するかが、初めの検討内容であった。2014年度のカリキュラム運用委員会で各領域から集めた意見をもとに、コアメンバーで3段階のカリキュラム2015レベル目標A案を作成した。このA案をワーキングで検討した結果、レベルは必修の実習を対象とすることを前提とし、カリキュラム2011

と同様に3段階で設定することが決定された。

2. 学習者の視点を活かした実習レベル目標の作成

1) 実習レベル目標を作成する際に重視した点

レベル目標作成にあたっては、以下の5点を重視した。

- 教育理念を再確認し、PCCの概念を分かりやすい表現で入れる
- 横軸の要素の表現を見直す
- 学部全学生がレベルⅢまで到達可能な目標とする
- 各領域、全学の合意のもとに作成する
- 学習者である学生にとって、使いやすいものにする

2) 実習レベル目標作成に至った経緯

①上記の作成の方向性を踏まえて、検討が進められた。

- 第1段階 2015年6月：実習レベル目標A案を作成し、各領域より意見を求めた。
- 第2段階 2015年7月：A案を基に、各領域からの意見を集約したB案を作成した。
- 第3段階 2015年8月：B案を基に、学生へのヒアリングを行い、C案を作成した。C案を全学に配信するとともに公開ワーキングを2回実施し、最終案としD案を作成し、カリキュラム運用委員会に提出した。そして、D案は2015年9月15日の委員会において、本学の実習レベル目標として正式に承認された。

②学習者の視点を活かした実習レベル目標の作成の経緯

レベルⅡの臨地実習においては、実習レベル目標の達成に向けて7つの領域で実習が行われている。各領域の実習が終了した時点で学生が自己評価を行い、指導教員と振り返り、次の実習に向けた課題を明確にするための評価用紙を用いてきた。

しかし、実際に使用する学生から、「実習レベル目標の表現がわかりづらい」「効果的に使われていない」との意見を聞くことが多かった。学習者が学ぶときの視点を明確にするための目標であったはずが、教授する側の意図で作成された使う学生にとってわかりづらい目標になっていることが問題であった。そこで今回の実習レベル目標を作成する際に、必修である総合実習までの実習が終了した4年生11名（養護教諭選択者・男子学生・学士編入生を含む2015年度教育改革推進事業に採択されたLAに応募した学生に協力を依頼した）に、『学習者にとって効果的な、本学の実習レベル目標を作成したい』という意向を伝え、コアメンバーによるヒアリングを実施した。ヒアリングは、学生11名を3つのグループに分け、延べ6時間にわたり行われた。この学生の意見を基に、カリキュラム2015実習レベル目標の骨格となったC案が作成された。

〈ヒアリングで得られた学生の意見（抜粋）〉

- 文言がわかりづらいので、学生にわかりやすい表現にする
- 横軸の要素、特に相互作用が何を意味するのかわかりづらい
- PCCの概念をより入れ込んだ表現にする
- 実習レベル目標をもっと効果的に各実習で用いるようにしてほしい
- 養護教諭課程を選択した学生も含めた学生全員が4年次までの自分たちの実習レベル目標として、捉えられる表現にしてほしい

3) 公開ワーキングの実施と検討内容

学生からの意見を基に作成したC案と作成に至った経緯について、教職員に学内メールで配信し、公開ワーキングを実施した。これは、ワーキンググループの教員のみではなく、学生の臨床教育に関心を持つものであれば誰もが自由に意見を述べられる機会を設け、本学の教育理念に沿った、かつ、多くの意見を反映させた実習レベル目標を作り上げたいというワーキンググループメンバーの思いから企画された。2回の公開ワーキングにおいて、活発な議論のもとD案が作成された。コアメンバーによる最終確認作業を行い、D案をカリキュラム運用委員会に提出し、2015年9月15日の会議において承認された。

〈公開ワーキングの概要〉

第1回 公開ワーキング 日時：8月6日（9時半～11時） 場所：402講義室 参加者：教職員17名（事務系職員2名を含む）

第2回 公開ワーキング 日時：8月31日（9時～10時半） 場所：402講義室 参加者：教職員11名

①公開ワーキング運営にあたり、意図したことは以下の3点である。

- 学習者である学生からの意見を軸に進め、シンプルかつ学生が理解しやすいものにする。
- 横軸の教育理念からおろした項目がわかりづらい。そのため、教育理念を理解した上で、項目を検討する。
- 各領域の特性により、対象の捉え方や大切にしたい部分が異なっている。この領域特性を踏まえ、全領域が納得できる表現で目標を作成する。

②公開ワーキングで検討された内容（抜粋）

- 養護教諭課程選択の学生でも使える表現：看護職ではなく専門職、看護上の課題ではなく健康上の課題と表現する。
- 多様性についての議論：PCCの考え方・その人らしさ・個人のみではなく集団や住民も含まれ、健康状態・発達段階や文化や国を超えたものである。地球規模で考える視点も持たせたい。
- 対象には人と環境が含まれる：領域により対象が異なるが、1年生も使用するので具体的な表現がよい。

家族は対象かそれとも環境か：家族も看護の対象である。1年生はナイチンゲール看護論の環境のイメージをもっている。ヘルスアセスメントの中では、項目内に家族も入っている。家族は環境にもなるし、対象にもなる。

- 保健医療福祉システムという文言の検討
- 思考プロセス：レベルによる段階表記にはどうか
I：看護上の課題判別・計画・II：主体的に行う・III：より幅広い対象
- 看護技術の実践：提供か実践か実施なのか。看護技術の言葉でよいかとの疑問提起に対し、ケアをなすエレメントが技術であり、看護技術のまま用いることとなった。安全・安楽は患者・学生の両義性を含む。学生は効率的、合理的の言葉の捉え方がイメージできない可能性があり、学生の間は、効率よりも何がこの方にとって大切なのかをよく考えてほしい。主体性という言葉を使えばその中に効果的要素も含まれる。
- 看護職としての態度：どのレベルにおいても根底となるものなので、レベルを設けず、倫理的・生涯学習していくこと・PCCの視点を軸にする。誠実に対象と向き合うことが大切であり、「誠実」の言葉は残したい。
- 「看護者の倫理綱領に基づき」という言葉を入れた方がよいかとの意見に対し、学生の価値観と専門職としての価値観に齟齬が生じることもあると考えられるため、入れないこととなった。学校保健では、教職としての倫理も入る：専門職の方が包含される。倫理的課題を考え、その土壌を内包しながら巣立ってほしい。学生の立場では解決できないことも、身体拘束などに対し、これは問題だと学生時代から感じることや惰性で慣れてしまわないような姿勢を身につけてほしい。倫理的課題が生じたときに表現・表出できる。人としてどうあるか自分が巻き込まれている状況と、対象に対するもの2視点に対するの要素を盛り込む。
- 看護観：24時間看護師ではないので、言葉として用いるのはどうか。生涯学習の視点は残した方がよい。態度の要素は、最初から持たねばならず、レベルが上がるにつれ、深みをつけていく感じである。
- 「人と環境への働きかけ」はより大きい概念であるため、右側に配置する。

3. 実習レベル目標に対する形成評価（ルーブリック）の導入に関する検討

実習レベル目標に対して形成評価（ルーブリック評価）の導入に関する検討が行われた。形成評価は、教授一学

習過程を展開している間に行われる評価であり、教員にとっては学習活動の判定・学生の学習と内容を適用する能力の査定・困難の特定のため、学生にとっては、学習方略の有効性・理解度などを判定するために行われる³⁾。検討に先立ち、教育学の教員（三浦）より、ルーブリック評価についてのミニレクチャーを受ける機会（6月23日）を設けた。

〈ルーブリック導入による利点〉

- 学習の具体的な方向性が示されており、学生の自律的な学習を促す
- 評者間の差を埋めやすくする

〈ルーブリックを導入した場合の懸念〉

- 領域横断的な科目における有効性については不明である
- 評価基準設定が課題によって困難である。たとえば、PCCの概念を入れ込む場合、何をエクセレントとするのかなど性質をうまく表現するのが難しい。

これらの検討の結果、実習レベル目標に対するルーブリック評価の導入は見送られることとなった。また、各実習科目においては、単位認定者の裁量のもと使用が可能であることが、あわせて確認された。

V. カリキュラム2015実習レベル目標への期待と課題

今回の活動を通して、聖路加国際大学のカリキュラムポリシーに常に立ち戻り、実習教育で学生たちに何を学んでほしいのかを話し合いながら実習レベル目標を作り上げるプロセスは、職域や領域の枠を超え本学の教育の向かう方向を確認し合う貴重な機会となった。

また、その軸となったコンセプトは、学習者である学生たちが使いやすいものを作るという姿勢であった。ワーキングには看護教員のみならず事務系職員の参加もあり、看護職ではなくても理解可能な文言としても整理された。そのことにより、本学のカリキュラムを熟知しない実習場の看護職にとっても分かりやすい実習レベル目標となったと考える。ヒアリングに参加してくれた4年生は、長時間に及ぶ話し合いにも関わらず、各々の意見を尊重し合い、積み上げてくれた。その意見の一つ一つから学生たちの4年間の成長を感じることができ、教員もその熱意に応えられるようによりよいものを大学全体として作り上げなくてはという原動力につながった。

今回作成したカリキュラム2015実習レベル目標が、実習において効果的に活用されることを大いに期待したい。しかし、目標はできたが、その達成度評価をする方法は統一されておらず、達成度の可視化をどのように実施していくかが課題である。今後も、実習レベル目標の活用評価を随時行い、学生にとってより使いやすいレベル目

標として洗練させていきたいと考えている。

謝 辞

実習レベル目標作成にあたり、ヒアリングにご協力いただいたLAの4年生の皆様、そして、公開ワーキングにご参加いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 菱沼典子, 井部俊子, 柳橋礼子, 吉川久美子, 高井今日子, 中村めぐみ, 松谷美和子. (2015). 看護学部

の実習強化に向けた看護学部と病院看護部の協働のプロセス, 聖路加国際大学紀要, 1巻, 68.

- 2) <http://www.slcu.ac.jp/gakubu/curriculum.html> [20151011]
- 3) Maratha Schckel. (2014). 第10章 カリキュラムの目標に到達するための学習体験の選択. 看護を教授すること原著第4版. 大学教員のためのガイドブック, Dian M. Billings, Judith A. Halstead, 奥村暁子ら監訳, 山本佳代子訳. 162. 医歯薬出版.